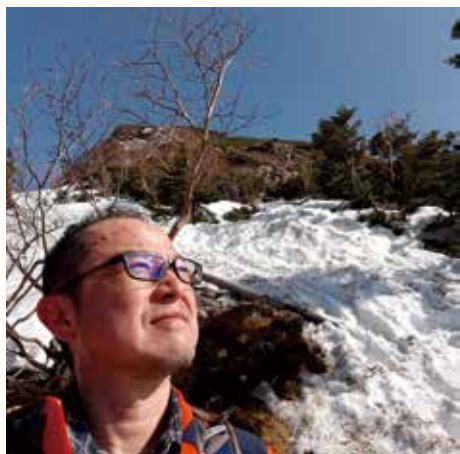


幻の「九州グマ」を探して

| KKB (株)鹿児島放送 代表取締役社長 | 後田 竜衛



もう 15 年も前の話だが、全国紙のデスクとして福岡で勤務していた 2011 年 10 月、「祖母山でクマ？目撃」という見出しの記事に驚いたことがある。祖母山は^{そぼさん}大分と宮崎県境にそびえる標高 1,756 m の深い山。これが本当なら、くまモンもびっくりの歴史的発見だ。九州ではとくにクマは絶滅したというのが常識だった。



しかし、目撃情報は山や野生動物に詳しい人から寄せられた具体的なものだった。地元の大分県豊後大野市は登山者の安全を確保するため、注意を促す看板を登山口などに設置した、と大分合同新聞の記事には

書かれていた。

この年の 5 月に東京本社から福岡に転勤してきたばかりだった私は、職場でそわそわしながら山好きの K 記者に話しかけた。

「クマを探しに行きたいな。足跡だけでも見つけたら大発見だよ」

「そうですね、行きますか！」

新聞紙面の編集を終えて製版を印刷工場に回す（＝降版する）と、現物が刷り上がって届くまではしばらくすることがない。職場でビールを飲みながら、クマ探しの計画を練った。

2011 年は東日本大震災が起きた年だ。東北の津波被害や福島原発事故など、日本全体が重苦しい空気に包まれていた。この年の春まで東京で司法担当キャップとして特捜事件や裁判を受け持っていたが、3 月 11 日の震災以降はすべての取材をストップし、震災取材に加わった。部下の記者たちは全員、被災地か本社の応援に行かせ、私も前線デスクとして宮城県の被災地に 3 週間泊まり込んだ。北海道函館勤務のときに北海道南西沖地震（1993 年 7 月）で大津波の被害にあった奥尻島で半年ほど取材した経験がある。島南端の日本海に 200 m ほど岬が突き出た青苗地区は、高さ 30 メートルの津波に飲まれ、岬の集落ごと壊滅したが、それをはるかにしのぐ規模の大津波に襲われた海岸線沿いのかつての街並みが、がれきとなって遠くに霞んだ先まで続いていた。気仙沼港に近い県道には、排水量トン 379 トンもある大型のマグロはえ縄漁船が道路に打ち上げられ、莫大なエネルギーを物語っ



ていた。

そんな中での九州のクマ目撃談は、今思えば不謹慎だが、なにかわざわざ探しに行く価値のある、ロマンあふれる話題に思えた。K記者はアウトドア好きで、祖母山は初めてだが九州の山は登った経験がけっこうある、と胸を張っていた。私も山歩きが唯一の趣味で、夏も雪が残る北アルプスの大雪渓を踏んで白馬岳（2,932 m）や白馬鎧ヶ岳（2,903 m）をテントを担いで縦走したことがあったし、東京・奥多摩の初冬の雲取山（標高 2,017 m）や、高尾山（599 m）から奥高尾へ入って陣馬山（855 m）までの 15km ほどの尾根道は何度も歩いたことがあった。雪の積もった登山道は天気さえよければサクサクと音を立てて歩きやすい。



日程をやりくりし、祖母山行きが実現できたのは 12 月に入ってからだった。山頂付近はうっすらと冠雪していて、クマが生きていても冬眠しているかもしれないが、も

しまだ活動していたらかえって足跡やフンなどの痕跡を見つけやすいかも——などと考えた。

早朝にレンタカーで福岡を出発して大分に入ったころ、リュックというよりはスポーツバッグに近い K 記者の荷物を見て、装備が気になった。雪山というほどではなくても、雪の登山道を歩くなら登山靴の底に 4 本爪か 6 本爪の軽アイゼンを装着したほうが安全だ。

「雪があると思うけど、アイゼン持ってきたよね？」

だが、K 記者は不安そうに答えた。

「アイゼンって、何ですか？」

山慣れているといっても、九州勤務の若者が雪山を歩いたことがないのは無理もない。登山用品店を探して市街地へ。運よく、たいして時間をロスせずに最低限の装備を入手することができた。

現在、祖母山の九合目小屋は無人の避難小屋になっているようだが、当時は管理人のおじさんがいて、クマ探しに来たと豪語する私たちの話を笑って聞いてくれた。寝袋にもぐりこんで寝るときもストーブの熾火は残っていたが、山の気温は標高 100 m 登るごとに 0.6 度下がる。柱の寒暖計を見ると、針は氷点下を指していた。

翌朝、雪の積もった小屋の周囲にかなりの野生動物の足跡を見つけたが、小さいものばかりで、熊らしい痕跡は見つからなかった。「クマ探検隊」の珍道中は、1 行も記事にならなかった。翌 2012 年、環境省は九州のツキノワグマを改めて「絶滅種」と認定した。九州の熊を研究した論文などを読むと、明治から昭和にかけて森林伐採や狩猟が進み、九州のツキノワグマは捕りつくされてしまったようだ。もっとも最後の目撃情報があった 2011 年からさらに 24 年ほど前の 1987（昭和 62）年にも、同じ祖母山でクマが捕獲（射殺）されたことがある。当

時の報道によると、まだ子熊で、DNA 型を調べたところ北陸地方の個体と同じ配列のツキノワグマだったといい、九州の外から持ち込まれた可能性もある。子熊は母熊と共に行動し、母熊は危険を冒して縄張りを離れる可能性は低いが、オスはエサやメスを探して移動するというから本州から九州に泳いで来た可能性もなくはない。関門海峡の狭いところは 650 m ほど。山口にも勤務したことがあるが、萩市や下関市では当たり前にクマが目撃される。若いオスが対岸の門司を目指して泳ぎ着き、しばらく生息する——というのはあり得ない話ではない。



かつて勤務した北海道と青森との間には「ブラキストン線（ライン）」という生物分類学上の境界があることが知られ、ツキノワグマは北海道へは行かないし、ヒグマは本州へは移動しない。ところが、青函トンネルを通して、キタキツネが青森県側で目撃された例はいくつもあった。

最近、本州で盛んに目撃されるクマの行動を見ていると、民家や自動車、歩いている人間といったものをほとんど恐れていない。そうだとすると、関門海峡の海底トンネルや大橋を悠々と歩いて渡って九州に来ることだってあるのではないだろうか。

鹿児島でも昨年 12 月、南九州市で黒い動物が道を横切るのを見たという情報があるそうだ。クマではないにしても、イノシシやアナグマ、アライグマなどの可能性はある。動物の生態や習性を正しく知り、正しく恐れる「距離の取り方」は、子どもたちの安全な通学や、農林業などの産業と地域経済の日常を維持するうえでも必要な知識となりつつある。就職や転勤、進学で九州を離れる可能性のある人は、カプサイシンを使ったクマよけスプレーを使う練習をしておいたほうがいいかもしれませんね。(終)